

竹沢尚一郎編

『宗教とモダニティ』

世界思想社 二〇〇六年三月一〇日刊
四六判 vi+二八六頁 一九〇〇円+税

江川 純 一

本書は、平成二二―一三年度文部科学省科学研究費基盤研究「宗教とモダニティの関係についての総合的研究——世俗化論を超えるために」に基づいた論文集である。編著者の前著『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』（世界思想社、二〇〇一年）は、フランスにおいて民族学・人類学というディシプリンがいかなるコンテクストの中から生じ展開したのかを明らかにしたものであった。アフリカに対する視線の系譜を分析することによって近代フランスを問うたところにその要諦があった。本書では対象がフランスから広げられ、今度は宗教の具体性をおして近代が問われている。

まず、編著者は「序文」において「モダニティ」の語を次のように規定する。「十八世紀後半以降、西欧の諸社会で実現された一連の文化的・社会経済的变化と、それが資本主義とともに各地に伝えられることで生じた、世界規模での人間の生の形態の変化」（二頁）。その上で宗教とモダニティを相関的・相反的と捉える。相関的だというのは「宗教の概念そのものがモダ

ニティとともに生み出された」ためであり、相反的だというのは「モダニティを推進する主要な要素のひとつであった啓蒙主義の運動が、宗教批判をもって開始された」（四頁）ためであるとされる。その前提となっているのが、宗教をモダニティのアンチテーゼとする世俗化論への疑問である。世俗化論の循環論法を回避するために、宗教学を「宗教という対象によって規定される研究領域であるだけでなく、モダニティそのものを問う一科学」（八頁）と捉え、これまで宗教の研究に用いられてきた諸概念を個々のコンテクストまで引き戻した上で、それらの概念の妥当性と有効性を検討すること（九頁）が目指されている。宗教学の可能性を示唆する見解である。

こうした問題設定は、本書において着手された（と編著者が述べる）「宗教とモダニティ、宗教とファシズム、植民地主義と宗教、憑依とアイデンティティ、宗教と偽装としての宗教研究」といったテーマについてだけではなく、所謂グランドセオリーの連なりや研究者の影響関係で作られてきた宗教学史を再検討する際にも有効であろう。

さて、本書の目次は以下のとおりである。

序文 宗教研究とモダニティの現在

竹沢尚一郎

I 宗教と世俗の乖離

第一章 世俗化論争と教会——ウィルソン世俗化論を手がかりにして

山中 弘

第二章 「聖なるもの」の系譜学——デュルケーム学派から

エリアーデへ

竹沢尚一郎

書評と紹介

II ファシズムにいたる道

第三章 流浪する宗教性——ジンメル宗教論とドイツ近代の

宗教状況

深澤英隆

第四章

ルーマニアにおけるファシズム運動と知識人——レ

ジオナール運動とフォークロア研究からみた一九三

〇年代

新免光比呂

第五章

神社の近代——祭祀と宗教のあいだをめぐって

川村邦光

III 近代化、西洋化と宗教の遭遇

第六章

アイデンティティはモダニティの彼方に——北タイ

の霊媒カルトと美的再帰性

田辺繁治

第七章

宣教の出会いと植民地主義——ベトナムにおけるイ

エズス会とパリ外国宣教会

萩原修子

全体は大きく三部に分かれている。これは編著者によると社会の三つのタイプに対応している。すなわち、I「近代化の先進社会」、II「後発近代化社会」、そしてIII「西洋諸国による植民地支配か、あるいはそれに類する西洋の圧倒的なプレゼンスのなかで近代化を経験した社会」(五頁)である。以下、各論文を順に見ていきたいが、評者の知見の偏りからコメントの長短が生じていることを始めにお断りすると同時に、著者の方々には非礼をお詫びしたい。

第一章の山中論文は、ブライアン・ウィルソンによる世俗化論とそれへの批判を、各研究に主要なデータを提供したイギリス教会史というコンテクストに戻して考察したものである。近

代化の進展に伴う「宗教の社会的意義の喪失」を指摘した世俗化論についての論争が、二つの局面で扱われている。まず宗教学での論争は、それぞれ幅を有するが修正派(世俗化論を多元的に展開)と廃棄派(例えば、世俗化論を宗教的領域の分化・衰退・私事化の三つに分け第一番目のみを正しいとするもの)の二つに集約可能であるとされる。それでも「中範囲の理論的レベルから個別的な宗教・分化伝統の相違を考慮した他地域的・多次元的な方向性」(二三頁)という点で両者には共通点がある。一方、ウィルソン派自体はこの論争に乗らずに世俗化論を主張し続けているのだが、著者はウィルソン理論における「事実」と「イデオロギー」を峻別する実証主義的な宗教理解を看取する。また世俗化論の背景には教会史家たちによるイギリスの教会についての重厚な研究が存在することも指摘される。そしてリヴィジョニストと呼ばれる教会史家たちは反世俗化論の立場に立つが、教会の利害に関わっているために伝統的な宗教概念に依拠せざるを得ず、むしろウィルソン理論との概念の共有がみられるということ、そして両者の間には制度的宗教の衰退という「事実」をいかに解釈するのかという問題が横たわっていることが明らかにされる。ドメスティックな枠組みに論点を絞ったことで、世俗化論の整理に見事に成功している好論文である。

第二章の竹沢論文は、フランスにおける「聖」の変遷を辿ったもので、デュルケーム、モース、ユベールらによる「社会学年報派」、カイヨワやレリスらによる「社会学研究会」、そしてエリアードが対象となっている。編著者は次のように論を運

ぶ。聖と俗の質的差異を指摘していただけただけのデュルケームに対し、ユベール&モースは聖と俗の関係を位置づけ、その媒介としての儀礼に着目した。ユベール&モースによる聖俗論・儀礼論とスペンサー&ギレンのオーストラリア研究がデュルケームの『宗教生活の基本形態』を準備した。デュルケームは俗のなかからいかに聖が生み出されるかを考えるに至り、「聖」は社会統合を可能にするものとして要請された。デュルケーム学派の聖俗論は、カイヨワに批判的に継承される。彼は「聖」の社会的機能よりもその意識へのあらわれを優先させ、レトリックと非合理に傾斜し、「聖」の社会的コンテクストを捨象した。この辺りまでは特に問題がない。しかし続けて著者はこう述べる。「カイヨワのこの本は、インド宗教史とルーマニア民間信仰の研究者であったエリアーデが、比較宗教学者に転進するのに決定的な影響を与えたのである」(七五頁)。評者はこの見解を鵜呑みにすることができない。確かにエリアーデがカイヨワの『人間と聖』を読んで何らかのアイディアを得たことは想像に難くない。著者はエリアーデが『宗教史概説』の序文で真先に「快著」と評価していること、エリアーデのキー概念がもととはデュルケーム学派のものでありそれを脱文脈化したのがカイヨワであることを指摘する。しかし「エリアーデの自伝である『日記』と『回想』は私には隠蔽と虚偽の書としかいえないものではないものであり、それを額面どおりに受け入れることは不可能である」(同)とまで断言するのなら、同じエリアーデによる序文も疑ってかかる必要があるのではないか。

エリアーデの学については、著者が指摘しているルーマニア

のファシズム運動、デュルケーム学派による聖俗論に加え、次の二つを無視することはできない。すなわち①カント↓フリースの流れにあるオットーの聖概念、②イタリア歴史主義↓ペッツォーニによる宗教史である。これらのアマルガムがエリアーデであるが、その際に彼は①を「聖」自体の説明可能性の放棄、②を歴史的コンテクストの無視という形でそれぞれ処理した。往復書簡集 (Spineto, N. (ed.), *L'histoire des religions a-t-elle un sens? correspondance 1926-1959, Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, 1994, Paris, Cerf*) が示すように、エリアーデが比較宗教学に向かう上でペッツォーニ宗教史学の存在はこれまで考えられてきた以上に重要性を持つていてと評者は考える。最後の部分で著者は「聖」の分析概念としての有効性に異議を唱えているが、イタリアで展開した宗教史学が「聖」概念を使用しなかったという事実とは、「聖」の系譜学的研究に逆方向から寄与するのではないだろうか。

第三章の深澤論文は、ゲオルク・ジンメル近代論・宗教論における両義性・未決定性がドイツ近代と宗教との関係を映し出していること、さらには彼の宗教理解がポスト近代をも示していることが扱われた論考である。まずジンメルが、人間を疎外するもの・解放するもの・幻惑するものという三つの相で近代を捉えていたことが提示され、次いで、彼の同時代宗教論、宗教／宗教性の二分法、生／形式の二分法が跡付けられる。そしてジンメルにおける近代と宗教との関係について次のように示される。「疎外」というアスペクトにおいて、ジンメルは宗教自身の潜在力と対抗的文化形成力を認めつつも、具体的な宗

書評と紹介

教文化の生の表出に否定的であったこと。「解放」はドグマと宗教的実在論からの解放であったが、「宗教」からの「宗教性」の解放でもあり、宗教性そのものは宙に浮いてしまったこと。「幻惑」する近代はあらゆるものの流動化・相対化であったが、この局面においてジンメル宗教理解そのものも相対化されているということ。「生」と「聖」の接続性・連続性がどのようにナチズムに流れ込んでいくのかをさらに知りたいと思う。

第四章の新免論文は、ルーマニアにおける右翼急進運動であるレジオナール運動に共鳴し参加した知識人の多くが民間伝承詩ミオリツァの研究に携わっていた事情を分析することで、ルーマニアの近代化とファシズムとの関係を明らかにしている。フォークロア研究における羊飼いの無抵抗の死と、レジオナール運動のなかの犠牲や死と結びつけるものを著者は「ルーマニア的宗教性」と呼んでいるが、イタリア・ファシズムにおける「古代ローマ性 (latinità)」とも通じるものであり極めて興味深い。イタリアの場合、国家の統一が遅れじつくり近代化を行えなかったこと、さらに国民意識が極めて脆弱であったことが、ファシズムを招く一因となった。国家への帰属意識を高めるために持ち出されたのが「古代ローマ性」である。イタリア宗教史学はファシズムによって誕生したにも関わらず、ファシスト政権の政策にそれほど翻弄されなかった。ルーマニア国内で宗教学もしくは宗教史学と呼びうるディシプリンはどのように立ち上がったのか。また、そのルーマニア宗教とミオリツァ解釈やレジオナール運動における「ルーマニア的宗教性」はいかに相関するののかという点について著者にお伺いしたい。

第五章の川村論文では、明治期以降、政府の神道政策に神社が翻弄されていく様が丁寧に辿られている。「神社の遭遇した近代とは、宗教という官製のカタゴリーから外されることによって、宗教たることを認識することなく、宗教たることを忘却して、神祇制度のなかに埋没し、宗教といわば成熟すること停止していった歴史的プロセスだったといえる」(一九八頁)という著者の見解は非常に興味深い。また戦死者の増加に従って「人民の信仰帰依」が増す靖国神社の特異性も浮き彫りにされている。加藤玄智への言及があったが、これら神道政策と宗教を対象にする学との関わりが明示されるならば、さらに充実した研究となるのではないだろうか。

第六章の田辺論文は、北タイの都市部の霊媒カルトにおける参加者のアイデンティティ形成を、美的再帰性に注目しながら扱ったものである。患者が治療者に転換するという「流動的で、開かれた、そして変転する」(二四三頁)アイデンティティ構築は西欧的モダニティの個人をモデルにしたものとは異なっており、後期フーコーによって敷衍された権力関係における闘争・抵抗・交渉を考慮する必要があることが述べられている。事例に適合するように既製の理論(ギデンズ、レイヴ、ウェンガーなど)を組み合わせていくその過程を窺い知ることができる。

第七章の萩原論文は、十七世紀前半のイエズス会と、後半以降のパリ宣教会によるベトナムでのカトリック布教において、

宣教師達の現地への視線がどのように変化したかを分析している。宣教師の他者観が「理性にかなう人々」から「文明化されるべき人々」へと移り変わるその過程に植民地主義的二分法の発生をみるその視点は、大いに参考になる。

以上、不十分ながら各論文を概観した。(先にも少し触れたが)宗教とモダニティについて考える際に、さらには宗教研究全体にとつても避けては通れないテーマであると思われるのが「ファシズムと宗教」という問いである、と書こうとしたのだが、編著者は既に新たな基盤研究「ファシズム期の宗教と宗教研究にかんする国際的比較研究」を開始しているようである。

今後の研究に強く期待したい。二〇〇五年の学術大会における自由パネル発表「ファシズム期の宗教と宗教学―イタリア、ドイツ、日本における―」の後、当パネルを主催した久保田浩氏との間で終了後に話題になったのが『日本、イタリア、ドイツにおける英雄主義の宗教的根源 (Religiöse Wurzeln des Heroismus in Japan, Italien und Deutschland)』についてであった。これは一九三八年の秋以降、ドイツのハインリヒ・フリックが、(マールブルクでフリックと関わりを持っていた)日本の北山淳友、イタリアのペッタッツォーニに持ちかけた出版計画である。計画は頓挫するのだが、この個人レベルでの連携の試みを個々のコンテキストにまで戻って考察することは、ファシズムの比較研究の出発点になりうるであろう。

全体を通して言えるのは、本書は通読する書ではないということである。大きく三部に分かれてはいるのだが、主題がまちまちで相互連関が薄い。「近代」でも「近代化」でもなく両方

の意味内容を有すと編著者が規定した「モダニティ」の語も執筆者に共有されていない。三つのカテゴリーのあいだそれぞれに報告会での議論を挟むと良かったのではないか。個々の論文に教えられる点が多いだけに残念である。尤も、この状況がモダニティだと言われれば納得するしかないのであるが。